

第56回全日本実業団剣道大会

平成25年9月23日(祝)日本武道館
主催◆全日本実業団剣道連盟
撮影◆建田正仁

NTTが頂点へ

【大将】下村(NTT) vs 小野(西日本シティ銀行・本店)

▲副将戦の勝利で逆転したのは西日本シティ銀行。メンバーの奮闘を受けた小野は開始から勢いよく攻める。一方の下村は落ち着いた試合ぶりを見せ、小野が出てくるところにコテを先取。その後は激しい攻防となるも、最後は下村のコテが再び決まった(写真)

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
NTT		齊藤 ②メ	岡 ③メ	阿南 ④メ	竹越 ⑤メ	下村 ⑥メ	2
西日本シティ銀行(本店)		甲斐 内野 渡辺	岡 アメ	阿南 アメ	竹越 アメ	下村 アメ	3

毎回多数のチームが参戦するこの大会ならではの特徴として、1回戦から準々決勝までは1試合の時間が3分間と短いことが挙げられるだろう(準決勝からは4分間となる)。試合時間が短いだけに参加選手も自然とアグレッシブな戦いを見せ、日本武道館に設けられた16コートの各試合場では熱戦が繰り広げられた。

実業団日本一の座を目指し、実に336もの企業がエントリーした今大会。その頂点に立ったのはNTT。関東大会、そしてこの全日本大会とともに上位を賑わす強豪チームという印象が強いが、大会の優勝となると第49回大会(平成18年、NTT東日本・本社)が優勝以来のこととなる。7年もの雌伏の時を経て、やっとつかんだ4度目の日本一。決勝戦を終えるやいなや、選手、関係者らの目には涙がにじみ、この日のために費やした日々の苦しさを感じさせた。

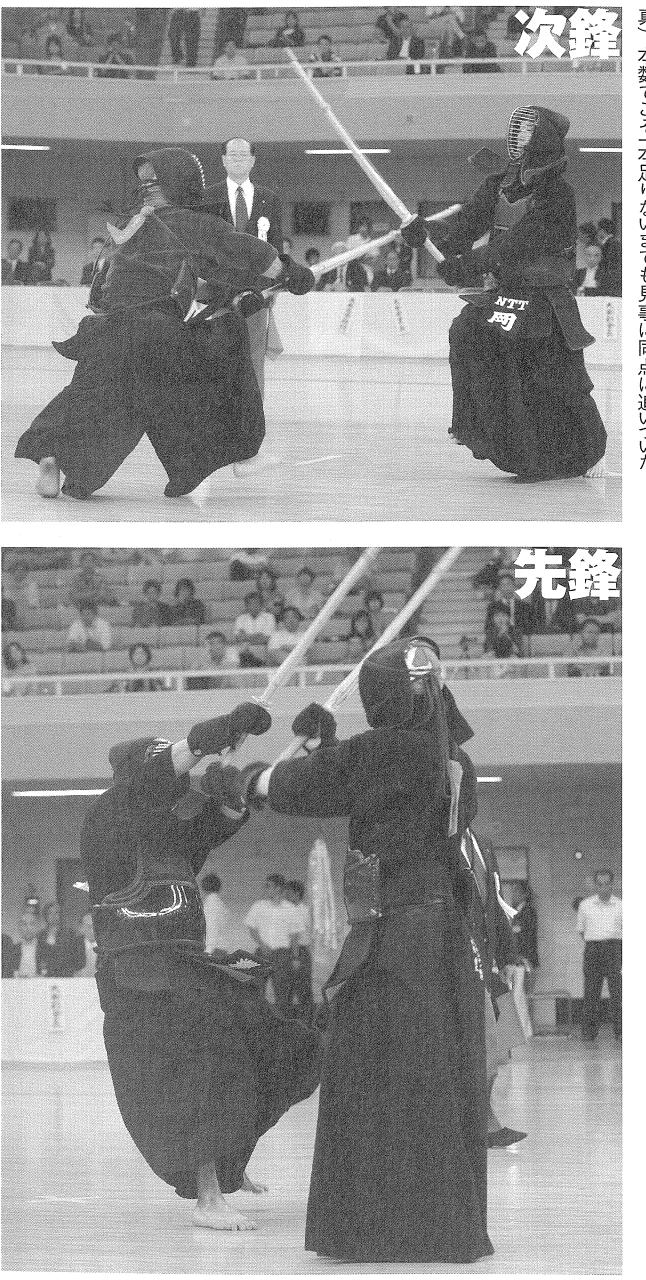
NTTが決勝戦を争ったのは、今回が初の決勝進出となる西日本シティ銀行(本店)であった。福岡を拠点とする同チームには強豪選手が数多く所属。九州大会は

もちろんのこと、この全日本大会でもその存在感をアピールしてはいたが、決勝戦へとコマを進めるまでにはあと一步のところで武運に恵まれてこなかつた(西日本相互銀行時代に3位が2回、西日本銀行として3位が2回ある)。今回ついに長く立ちはだかっていた準決勝の壁を突破し、悲願の決勝進出を叶えたのであった。

過去の戦績に優るのはNTTのほうだが、やはり西日本シティ銀行の勢いは警戒すべきものがあったようだ。NTT・高井誠監督は優勝決定後の談話で「(西日本シティ銀行は)素晴らしいチームだと思います。それだけに決勝戦前には選手たちに『こちらが胸を借りるつもりで戦つこい』と話して送り出しました」とあくまで挑戦者の気持ちで決戦に臨んだことを明かしている。

NTTにとって7年ぶりの、西日本シティ銀行にとつては初となる日本一がかかる戦いは、先鋒戦でNTTの齊藤が新らしさはつらつとした試合ぶりを見せれば、西日本シティ銀行は次鋒戦、副将戦と執念の見える戦いで結果的に勝負を逆转させた。そして雌雄を決した大将戦の緊張感――。優勝、2位とそれぞれ順位は着いたものの、試合結果よりも試合内容が強く印象に残る、まさに決勝戦にふさわしい激闘であった。

優勝を決めたNTT陣営、誰からともなく円陣を組み、互いに健闘をたたえ合う。高井田監督の目にもまた涙。嗚咽を堪えながら監督が語ったのは、優勝に手が届かなかつた期間の辛さ、悔しさ。



NTTの齊藤は中央大学出身、西日本シティ銀行の甲斐は早稲田大学出身。両チームともに先鋒を務めるのは23歳の新戦力だった。新鋭同士の戦いは齊藤が技ありのコテとひきメン(写真)で二本勝ちを挙げた



最優秀選手賞
下村和弘
NTT・28歳・五段



準々決勝【次鋒】中石(日本通運・本社)④メ 奥島(伊田テクノス・本社)

▶先鋒・松田の勝利を受けた中石がわずか1分30秒ほどでメンを二本連取し(写真は二本目)、王手をかける。伊田テクノスの大将・橋本は実業団剣道界きっての猛者だけに日本通運も手堅く戦い、その後の中堅、副将戦を引き分けに押さえて勝利

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
日本通運(本社)		松田	中石	紺野	柴田	黒木	2
	④メ	②メ	××	××	×	①	3
伊田テクノス(本社)		奥島	花亥	奥島	栄花元	石山	1



準々決勝【副将】竹越(NTT)④メ 菊池(ペアハグ・本店)

▲初の入賞を狙うペアハグが奮闘。先鋒戦、中堅戦を奪ってNTTを追い込んだ。勝負どころとなった副将戦、あとない竹越だったが、ここでは一本目にコテを決めるや(写真)、その後にメンも追加。大将戦はNTT・下村が31秒の圧巻の勝利

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
NTT		齊藤	岡	阿南	竹越	下村	2
	④メ	②メ	××	④メ	④メ	④メ	4
ペアハグ(本店)		外丸	丸山	鶴	菊池	上野山	2



準々決勝【次鋒】内野(西日本シティ銀行本店)④メ 藤根(日新電機)

▲先鋒の二本勝ちを受け、気をよくした内野は上段・藤根の片手メンを誘って返しメンを二本連取(写真は二本目)。この日健闘を見せてきた日新電機だが、ベスト4進出を賭けたこの戦いでは西日本シティ銀行の前に押し切られた

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
西日本シティ銀行(本店)		甲斐	内野	渡辺	濱地	小野	4
	④メ	②メ	④ド	④ド	④ド	④ド	7
日新電機		西澤	藤根	北村	國奥	風田	1

西日本シティ銀行にとっては長年破ることのができなかつた準決勝の壁が、「ここで

の攻撃力を見せつけ、大差で相手を突き放す試合が幾度も見られた。決勝戦もさることながら、準決勝の三井住友海上(本店)との試合もまた見応えのある内容だった。

今年は関東大会で2位に入賞している三井住友海上は、中堅の鈴木と大将の高村が軸となり、6回戦では昨年の優勝チームであるパナソニック(ES本社)を擊破している。この日とくに光っていたのは大将・高村の勝負強さ。6回戦は大将戦の末の勝利。準々決勝ではリードを許した展開を自らの勝利で代表戦に持ち込むなど、「ここぞ」という場面で、求められる条件どおりの勝利を挙げてきていた。

惜敗を喫して3位に終わった三井住友海上だが、実はこの大会での入賞は第51回大会(平成20年・当時は優勝)以来、5年ぶりのこと。関東大会に引き続き、今大会もまた若手メンバーアップを配した新しい布陣で臨んでいるだけに、「これはいざれ来たる新たな飛躍の兆候」と見てよいだろう。

3位のもう1チームは日本通運(本社)。誰かがポイントを落とせばすぐさま挽回するなど、チーム一丸となつての戦いぶりで第29回大会(昭和61年・当時は東京航空

準決勝【次鋒】岡(NTT)④メ 中石(日本通運・本社)

▲先鋒はNTTの齊藤がわずか26秒の速攻の勝利。これに続けた奮闘したのは岡。思い切った跳び込みメンを決めて一本勝ち(写真は岡の攻め)。その後の中堅、副将を引き分けに終えたNTTが決勝戦へとコマを進めた

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
NTT		齊藤	岡	阿南	竹越	下村	3
	④コ	②メ	××	コ	④コ	④メ	6
日本通運(本社)		松田	中石	紺野	柴田	黒木	0



準決勝【大将】小野(西日本シティ銀行・本店)④メ 高村(三井住友海上・本店)

▲次鋒戦の失点により追う立場となった高村。この日はチームの救世主的活躍を見ていた高村だったが、さすがに力尽きたか。コテを浅く仕掛けたところを読まれ、小野にメンを打ち込まれる(写真)。挽回するには残り時間が少なすぎた

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
西日本シティ銀行(本店)		甲斐	内野	渡辺	濱地	小野	2
	④メ	②メ	×	④メ	④メ	④メ	3
三井住友海上(本店)		山田	石井	鈴木	井口	高村	0

準々決勝【代表】鈴木(三井住友海上・本店)④メ 俣野(東レ・研究所)

▲東レのリードで迎えた大将戦は三井住友海上・高村が初太刀のメンを決めて一本勝ち。代表戦へと進むことなく、代表に立つのはともにこの対戦で二本勝ちを挙げた選手同士。緊迫感あふれる戦いは試合時間1分ほどが過ぎたところで鈴木のコテで決着(写真左が鈴木)

チーム	順	先	次	中	副	大	得点	代
三井住友海上(本店)		山田	石井	鈴木	井口	高村	2	鈴木
	④メ	②メ	×	④メ	④メ	④メ	3	コ
東レ(研究所)		堀	八木	寺井	俣野	庄田	2	俣野

「それはもう……試合に出ている選手たちが一番身につまされていました」と思います。それでも何とかあきらめずに……あきらめそうになりましたが、それでもやり続けたことがあります。今日の結果につながったのだと思います。毎大会、今回は今回は、という思いで7年が経ちました。選手はそのプレッシャーに負けずに、本当によくやつてくれました」

今大会に臨むにあたっては、主将の下村を中心として、剣道の基本に立ち返った稽古を積んできたと監督は明かす。

「やれるだけのことは全部やろうと皆で一丸となって取り組んだ成果です。大将で主将の下村が率先して稽古をして、チームをまとめて引っ張ってくれました」

決勝戦、自らの手で優勝を決めた下村は大会の最優秀選手に輝いている。

一方、2位という結果に終わった西日本シティ銀行・古賀裕章監督は「初の決勝進出ですからうれしい結果ではありますがあまり残念と言えば残念。もう一步及ばずでした。課題も見えたので、また来年の優勝を目指してがんばります」とやや悔しさを滲ませた。

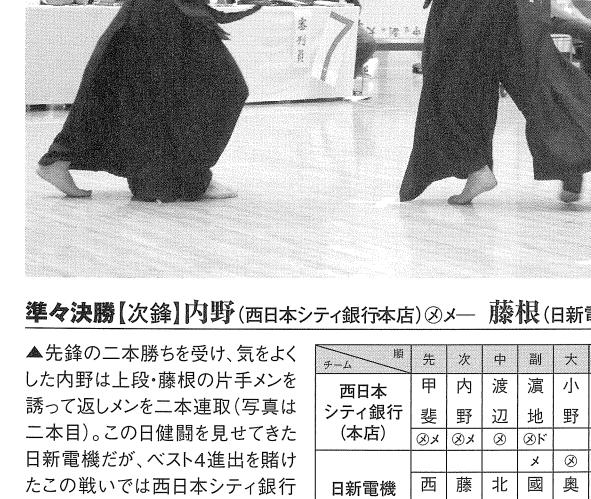
伝統ある西日本シティ銀行だが、日頃は福岡市中央区大濠にある体育館内道場を利用して、週に2回の稽古に取り組んでいるという。日々目指す剣道、そして自軍の特色として語るのが「攻めの剣道」。

「攻撃的なチームといいますか、引き分けを狙うのではなく一本を取りに行くようなチームですね」



6回戦 伊田テクノス(本社)2(4)X0(0)三井住友海上(神田) 大将 橋本(伊田テクノス・本社)④メ 宮本(ペアハグ・本店)

▲三井住友海上は中堅から小田口、立見、宮本と実業団剣道界で黄金時代を築いたベテランを据えた。前三人が引き分けたあと副将戦で伊田テクノスが一本勝ち。大将・宮本が攻めるが、ここは橋本がひきこみ(写真左)、片手ヅキで勝利を挙げた



西日本シティ銀行にとっては長年破ることのができなかつた準決勝の壁が、「ここで

の攻撃力を見せつけ、大差で相手を突き放す試合が幾度も見られた。決勝戦もさることながら、準決勝の三井住友海上(本店)との試合もまた見応えのある内容だった。

今年は関東大会で2位に入賞している三井住友海上は、中堅の鈴木と大将の高村が軸となり、6回戦では昨年の優勝チームであるパナソニック(ES本社)を擊破している。この日とくに光っていたのは大将・高村の勝負強さ。6回戦は大将戦の末の勝利。準々決勝ではリードを許した展開を自らの勝利で代表戦に持ち込むなど、「ここぞ」という場面で、求められる条件どおりの勝利を挙げてきていた。

惜敗を喫して3位に終わった三井住友海上だが、実はこの大会での入賞は第51回大会(平成20年・当時は優勝)以来、5年ぶりのこと。関東大会に引き続き、今大会もまた若手メンバーを配した新しい布陣で臨んでいるだけに、「これはいざれ来たる新たな飛躍の兆候」と見てよいだろう。

3位のもう1チームは日本通運(本社)。誰かがボイントを落とせばすぐさま挽回するなど、チーム一丸となつての戦いぶりで第29回大会(昭和61年・当時は東京航空

2位◆西日本シティ銀行(本店)

甲斐勇太、内野辰彦、渡辺雄太、濱地佳祐、小野公次、能塚靖裕。監督=古賀裕章



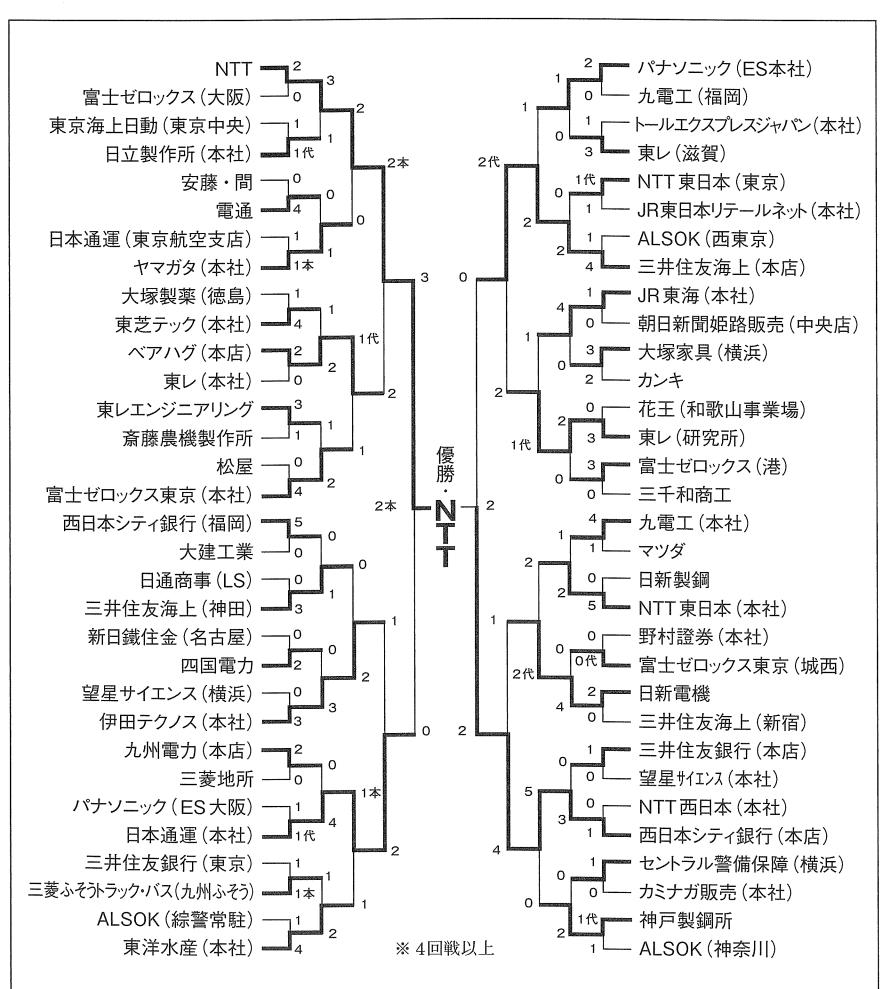
3位◆日本通運(本社)

松田悠、中石吉郎、紺野剛、柴田優貴、梯達斎、黒木哲也。監督=野村隆行



3位◆三井住友海上(本店)

山田健太郎、石井将勝、鈴木悠平、井口亮、高村泰央。監督=下畠精一郎



▲次鋒、奥島の勝利で先制した伊田テクノス。中堅戦を引き分けた後の副将戦では石山が鮮やかなメンに跳び込み(写真)、チームの勝利を決めた。その後の大将戦も奪った伊田テクノスが3×0の完封勝利を収めた

5回戦 東レ(研究所) 2(5) × 0(1) 富士ゼロックス(港)
【次鋒】八木(メ) 中尾(メ)



▲実業団の強豪チーム同士の顔合わせとなつた。次鋒戦で東レの八木が一本勝ちを挙げると(写真真は一本のメ)。左が八木)その後の中堅、副将は引き分けに終わる。大将戦追いつきたい富士ゼロックスの下川だったが、ここでは東レ・庄田に一本負けを喫した

5回戦 パナソニック(ES本社) 1(1) × 0(0) 東レ(滋賀)
【中堅】大龜(メ) 竹中(メ)



5回戦 三井住友海上(神田) 1(1) × 0(0) 西日本シティ銀行(福岡)
【先鋒】山邊(メ) 宮本(メ)

▲今年、福岡県代表として全日本選手権大会に出場する本川を中堅に擁する西日本シティ銀行。先鋒戦、山邊がメンを見せてのコテを決めて勝利すると(写真)、その後は三井住友海上が巧者ぶりを発揮。山邊の一勝を守り切った



5回戦 伊田テクノス(本社) 3(3) × 0(0) 四国電力
【副将】石山(メ) 井尻(メ)

▲次鋒、奥島の勝利で先制した伊田テクノス。中堅戦を引き分けた後の副将戦では石山が鮮やかなメンに跳び込み(写真)、チームの勝利を決めた。その後の大将戦も奪った伊田テクノスが3×0の完封勝利を収めた



6回戦 日新電機 2(4) × 0(4) NTT東日本(本社)
【代表】西澤メ 梅山(メ)

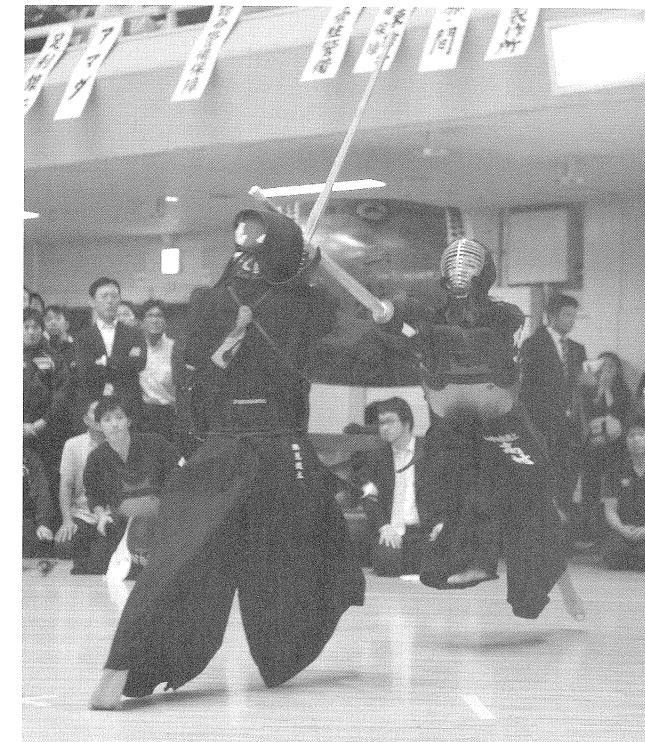
▲先鋒、次鋒で喫した連敗を、副将の梅山、大将の山本で挽き、NTT東日本が代表戦へと持ち込んだ。代表に立つのはNTTは副将・梅山、日新電機は先鋒の西澤山が軽快な動きで攻めるが、対する西澤も25歳の若手らしく元気に攻め返し、最後は梅山の出がしらにメンを打ち込んだ(写真)

6回戦 東レ(研究所) 1(2) × 0(2) JR東海
【代表】俣野メ 今泉(メ)



5回戦 NTT東日本(本社) 2(3) × 1(1) 九電工(本社)
【大将】山本(メ) 村岡(メ)

▲次鋒戦をNTT東日本・田門が奪えば、九電工も中堅の岡本が勝利し、同点同本数のまま大将戦に。NTT東日本の大将・山本は過去に日本代表として日本選手権大会の出場経験のある豪強選手。メンで先制した山本は、その後、村岡が強引に技を放つを余して「本目を追加(写真)」



6回戦 三井住友海上(本店) 2(5) × 1(4) パナソニック(ES本社)
【大将】高村メ 勝見(メ)

▲副将戦を終えた時点でスコアは2(3)×2(3)の同点同本数。大将戦、開始から仕掛けた高村が見事なメンで先制すれば、実力者・勝見もメンで返す。実業団トップレベルのスリルあふれる戦いは、最後は高村の力強いメンで勝負あった(写真)



6回戦 ベアハグ(本店) 1(1) × 1(1) 富士ゼロックス東京(本社)
【代表】上野山メ 野村(メ)

▲東レ(本社)、東芝テック(本社)ら名のあるチームを下して勢いに乗るベアハグ。富士ゼロックス東京との試合では先鋒(ベアハグ)、副将(富士ゼロックス)と星を取り合い、代表戦に。大将同士の代表戦は上野山の見事なメンで決着(写真)

チームが2位)以来の入賞を叶えた。この日は5回戦で九州電力(本店)、6回戦では伊田テクノス(本社)を撃破するなど、いずれも優勝候補と呼ばれる強豪を破つて会場を大いに沸かせた。

準決勝のNTT戦では許した先手を挽回できずに敗北。さすがに先鋒、次鋒の連敗は痛かったか。

今大会のベスト8には、伊田テクノス、東レ(研究所)と実業団大会では名の通りチームが顔を揃える中、ベアハグ(本社)、日新電機などは目新しい存在といえよう。20代の選手が揃うベアハグは、東レ(本社)、東芝テック(本社)を破つて6回戦へと進出。ベスト8進出を賭けた富士ゼロックス東京(本社)との代表戦は今大会を賑わせた一戦のひとつとなつた。

京都府に本社を置く日新電機は、5回戦、全日本選手権出場経験のある梅山、山本の2人を擁するNTT東日本(本社)を代表戦の末に倒して一躍注目を浴びた。準々決勝の西日本シティ銀行(本店)には大差で押し切られたが、この日倒した相手は東レ(本社)、東芝テック(本社)、そしてNTT東日本と猛者揃い。その地方は充分に証明できたといえよう。

その他、注目チームの戦いぶりを追えば、今年関東大会を制した富士ゼロックス(本社)は3回戦でALSOK(神奈川)に0-2のスコアで敗退。戦力の充実している東レ(滋賀)は5回戦でパナソニック(ES本社)に0-1の惜敗を喫している。